

政治経済

全米唯一、刑務所新聞の元編集長・元受刑者が遺したもの | ケイン岩谷ゆかり「女性ジャーナリストの視点から」

Text by Yukari Iwatani Kane

ケイン岩谷ゆかり 1974年、東京生まれ。米ジョージタウン大学外交学部卒業。1996年にロイターに入り、2006年～11年、ウォールストリート・ジャーナル記者。15年からカリフォルニア大学バークレー校ジャーナリズム大学院講師。著書『沈みゆく帝国 スティーブ・ジョブズ亡きあと、アップルは偉大な企業でいられるのか』（日経BP社）ほか



交通事故により急逝した、サン・クエンティン新聞の編集長を10年務めたアルヌルフォ・ガルシア氏

米国が抱えるシステム上の大きな問題のひとつに、刑事司法制度がある。カリフォルニア州では、たとえ軽犯罪でも3度捕まると終身刑を言い渡される。かたや、そのシステムのなかで、受刑者たちの教育プログラムを作り、リハビリに取り組む刑務所がある。

米国で活躍するジャーナリストのケイン岩谷ゆかり氏は、その教育プログラムの一環として、サン・クエンティン州立刑務所でジャーナリズムの授業を持つ。彼女がそこで出会った元受刑者のアルヌルフォ・ガルシア氏は、教育プログラムの創設に尽力したひとりだった――。

全米で唯一「新聞」を発行する刑務所

先月、私はある既決重罪犯の葬儀に参列した。

享年65の彼は50年の間、刑務所の出入りを繰り返した。私はカリフォルニア州サンタクララバレーの教会に向かいながら、約1年半前まで、自分の世界とはまったく異なる世界に生きてきたこの男性の死に対する、深い悲しみに打ちのめされた。それまでは重罪犯と知り合いになることは、ましてや友人になることなど考えられなかった。

私をはじめアルヌルフォ・ガルシアに会ったのは2016年の春。ジャーナリストの友人が、「サン・クエンティン州立刑務所で、金曜の午前中にジャーナリズムを教えるボランティアに関心のある人はいないか」という一斉メールを送ってきたのがきっかけだった。

サン・クエンティン刑務所は1852年、ゴールドラッシュ期に増加した犯罪に対処するために設立された。今

日、多くの方がこの刑務所を知るのは、ここに、刑の執行を待つ681人を収容する「死刑囚監房」があることからだ（もっともカリフォルニア州は2006年以来、死刑を執行していない）。

大勢の人を死に至らしめた悪名高いカルト教団のリーダー、チャールズ・マンソンをはじめ、これまで多くの連続殺人鬼がここに服役している。

だがこうしたことより知られていないのは、サン・クエンティンには、全米で最も優れたリハビリや教育プログラムがいくつもあるという事実だ。受刑者は、高校卒業と同レベルの資格や2年制や4年制大学の学位を取得でき、さらにはバイエリアの起業家たちが支援するコーディングの授業を受けることもできる。

関連記事：

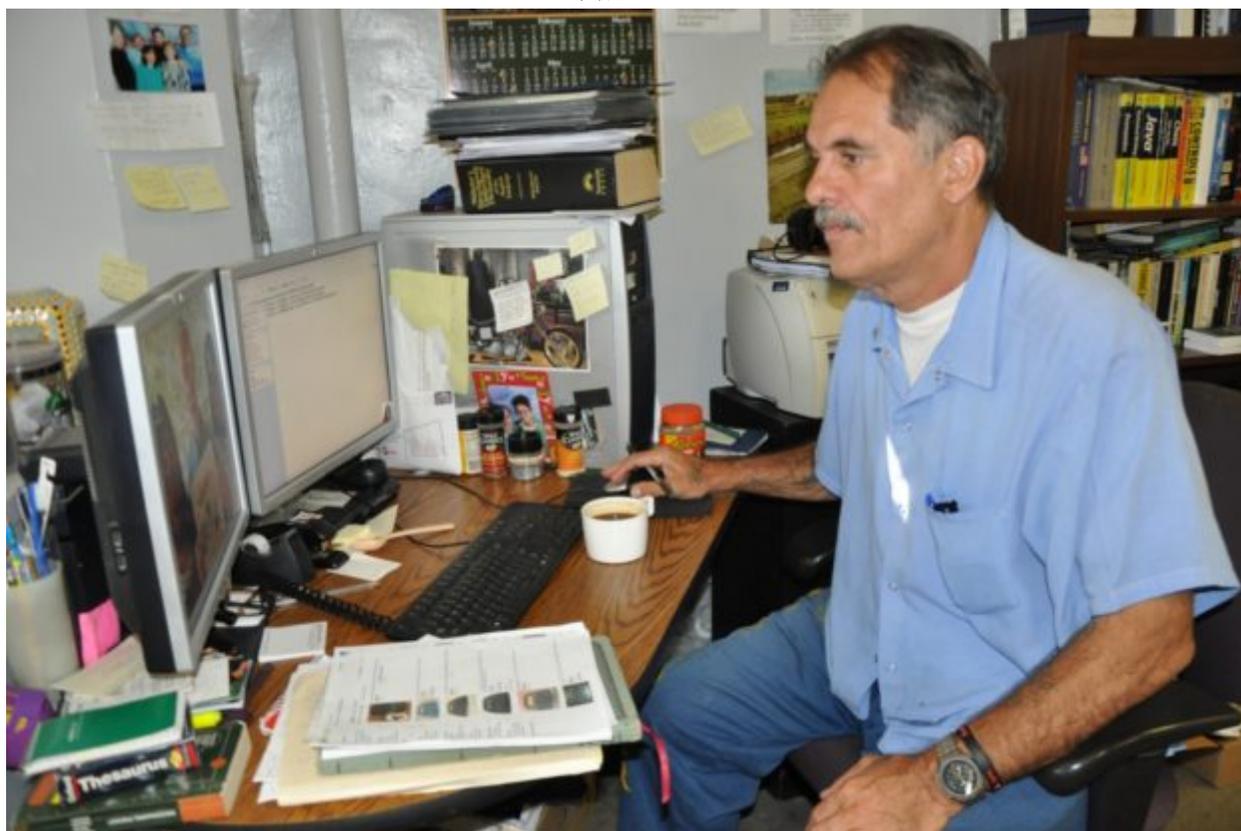
[「俺らは今日も、“ムショ”のなかでコーディングを学び、稼ぐ」 | IT技術者を養成するカリフォルニアの刑務所](#)

またサン・クエンティンには全米で唯一の受刑者が発行する刑務所新聞の編集室がある。新聞は助成金で運営されており、発行部数は3万部、州内35ヵ所の刑務所に配布。受賞歴もあるこの新聞は毎月発行で、12人の受刑者によって編集されている。



ホワイトハウスからも認められたサン・クエンティン新聞

記事の内容はイベントのレポートから刑事司法関連のニュース、人物紹介やスポーツの試合結果など多岐にわたり、さらにはクロスワードパズルや漫画まで掲載している。アルヌルフォは10年にわたってこの新聞の編集長を務めた。



ニュース編集室で編集作業をするアルヌルフォ

塀の外にある問題と塀の中の現実

私がボランティアをすることにしたのは、一つには好奇心からだった。

米国では、同じ罪を犯してもアフリカ系やヒスパニックの男性のほうが白人男性より厳しい刑を言い渡される事実はよく知られる。

また弁護士を雇えない者は、公選弁護士をあてがわれるのだが、公選弁護士はまともに対処しきれないほど多くの訴訟を抱えている。つまり被告人の多くは、適切な弁護を受けていないことを意味する。

私は米国の刑事司法制度が直面する問題の概観こそ把握していたが、それは読んで得た知識でしかなく、実際の刑務所についてはほとんど知らなかった。怖いという気持ちはあった。しかし、サン・クエンティン刑務所でボランティアをすることで、刑務所や受刑者に押し付けられたスティグマ（負の烙印）や彼らに関する既成概念に捉われずに、自分の心地いい領域の外に出て、自分の世界を広げたいという気持ちがあった。

ボランティア初日、同じくボランティアの70代ぐらいの女性に付き添われ、「サン・クエンティン村」に入った私の心は高鳴った。刑務所の入り口で書類に署名した後、私たちはメインゲートに続く道を歩き、メインゲートに着くと再び書類に署名してから二重扉を歩いていった。

「サリーポート」と呼ばれるその二重扉は、看守がまず1つ目の扉を開いて私たちを待機エリアに通し、私たちが最初の扉を閉じてから、刑務所内に続く2つ目の扉が開かれる仕組みになっている。2つ目の扉を通ると、背後で扉がガチャンと大きな音を立てて閉じられた。

所内に入って最初に目に入ったのは、驚くほど美しい薔薇の木ときれいに剪定（せんてい）された低木のあ
る庭だった。だが前方の角を曲がるやいなや、私は引き返したい気分に戻された。

私たちは数百人の受刑者が思い思いの時を過ごす「ヤード」と呼ばれるエリアに出た。ジョギングや腕立て
伏せをする者もいれば、数人で集まって話をする者もいた。テニスコートのそばをアヒルやガチョウがうろ
つき、かと思えば、目隠しのない男性用小便器がある。



刑務所内の「ヤード」

そのちぐはぐな光景に私は衝撃を受けた。看守の詰め所には、トイレットペーパーが必要な場合は自分の監
房から持参するようにと指示する表示があった。

教育センターに向かって男たちの間を歩く間、彼らの視線が私たちに注がれるのを感じた。受刑者たちはと
にかく礼儀正しかったが、彼らの好奇の目に私はたじろぎ、無数の「ハロー」という挨拶に圧倒された。こ
んなにも多くの受刑者にいきなり会うことになるとは予期していなかったのだ。

COURRIER
JAPON